

# 教育研究業績書

2016年10月01日

所属：幼児教育学科

資格：講師

氏名：藤本 勇二

研究分野	研究内容のキーワード
生活科教育 初等理科教育 環境教育	自然体験活動 カリキュラム開発 ESD 食育
学位	最終学歴
修士（教育学）	鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 教科領域教育専攻 修士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. ポスターセッションの導入	2010年	・「教科生活」において学んできたことを踏まえ、生活科の9つの内容領域との関連を盛り込んだ発表資料をグループごとに作成し、ポスターセッション方式で発表を行う。本活動を通じて、生活科における体験の意味や言語活動の充実の意義を実感させ、コミュニケーション力の育成と教育内容の確実な修得を図ることが可能となった。
2. 理科教育	2004年現在に至る	「科学の祭典を開こう」として「サイエンスフェアに出展しよう」理科学習に対して、「意欲・関心は高いものの、自ら進んで実験に取り組む者が少なく、理科の意義や大切さについて実感していることも少ない」という子どもたちの課題から、下級生に科学実験を紹介するイベント「科学の祭典」を実施することを目標として取り組んだ。体験的・問題解決的な学習を通して科学への好奇心や探求心を高めるとともに科学の真の面白さや楽しさを体得し、理科を学ぶ意義を実感できる場をつくることができた。科学館と学校の連携の形として実績を残すこともできた。「野依科学奨励賞（国立科学博物館）」受賞：平成18年度
3. 「切実な学びの中で確かな金銭感覚を育てる」	1997年現在に至る	地域の自然環境や生活文化の知恵に学ぶ環境教育を進め、地域への愛着を育む教育を展開。第7回、第8回全国環境教育賞奨励賞受賞（初草大好き地域に学ぶ環境学習）「こどもエコクラブ」の壁新聞等にまとめて全国大会に出席。学校版環境ISOを中心とした環境教育を展開。文部科学省環境教育実践モデル地域の指定を受けとして地域との連携を目指した環境教育推進。学校版ISOの取り組みで、「コココーラ環境教育賞（コココーラ教育・環境財団）」受賞：平成20年度 「環境美化教育環境大臣賞（社団法人食品容器環境美化協会）」受賞：平成20年度
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		
1. 日本生活科・総合的学習教育学会 学会賞	2009年3月	「総合的な学習の時間における協同的な学び」
2. 「金融教育を考える」第3回小論文コンクール特賞	2006年12月	「切実な学びの中で確かな金銭感覚を育てる」
3. 第50回読売教育賞最優秀賞受賞	2001年7月	「自然環境と暮らしの知恵にかかわり地域と創る学習」

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 食の授業アイデア集	単	2012年8月	全国学校給食協会	著者が実際に行った授業例をもとに、食を教材として、様々な教科やクラスで活用できるワークショップのアイデア（手法）を「遊び」「つくる」「調べる」「比べる」「気づく」「まとめる」と6つのテ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
2. 文部科学省「食に関する指導の手引き」	共	2010年	文部科学省	一冊に分けてまとめた。 食に関する指導の充実に取り組み、また、学校における食育の生きた教材となる学校給食の充実を図るため、食に関する指導の手引書として作成。食に関する全体計画、学教科等や給食の時間における食に関する指導の基本的な考え方や指導方法について改正学校給食法を踏まえて解説。（担当部分概要）pp. 66～82
3. 学級担任のための食育の授業	単	2009年	ひまわり社	生活科をはじめとする諸教科において学級担任による食育指導の手法を具体的に分析、提案した。特に、食育に関する子どもたちの興味・関心を高めながら、望ましい食生活習慣を育てていく授業作りの視点を重視すると共に、生活科における栽培活動を踏まえながら、「旬の野菜を食べよう（学活）」、「野菜のどこを食べているのかな」（理科）など、学級担任が家庭科・理科・社会・国語・学活などの時間でできる授業を紹介した。
4. 小学校学習指導要領の解説と展開 総合的な学習編	共	2008年	教育出版社	平成20年3月に改訂告示された小学校学習指導要領の改訂のポイントを解説。新学習指導要領に基づく指導計画の作成例・授業の展開例や「確かな学力」「思考力・判断力・表現力」「習得・活用・探究」「言語活動の充実」など、今次改訂のキーポイントについて解説するとともに授業改善の手立てを具体的に提示している。 （担当部分概要）pp. 94-119。 「子どもの興味・関心を大切に学ぶ」「地域教材の開発のポイント」等授業改善のポイント。pp. 148-179. 新学習指導要領に基づく単元の展開例。
5. 学びを深める食育ハンドブック	共	2005年	学習研究社	生活科・総合的な学習の時間で取り上げる題材の可能性の検討や活動例のアイデアなど、これまで触れられることの少なかった教材研究と単元開発の視点などから丁寧に取り上げた。とりわけ、生活科における栽培活動に着目し、継続的な栽培活動を支援するカリキュラム・プランニングと体験だけに終わらず学びを深めていく手法を具体的な事例を通して提案している。 （担当部分概要）p. 38. 理科が担う役割。pp. 42-43. 学校給食が担う役割。pp. 54-120. 教材としての可能性を題材ごとにウェビングで提示。pp. 132-133. 各学年での単元計画例と都市・農村・山間部と立地条件の異なる学校を例にした年間計画。pp. 136-142. 食育を支えるマンパワー。
6. 環境教育指導資料（小学校編）	共	2004年	国立教育政策研究所教育課程研究センター	環境教育に関する国際的な動向や今日の課題も踏まえ、持続可能な社会を構築するために必要な考え方や取組等についての総合的な解説、環境教育の基本的な考え方や指導展開等の解説、各教科等における実践事例を紹介。 （担当部分概要） pp. 58-61 家庭科における実践事例執筆。 pp. 70-73 総合的な学習の時間における実践事例執筆。 pp. 86-89 家庭科や地域と連携を図った実践事例執筆。
<b>2 学位論文</b>				
1. 実験、観察形態の理科学習に及ぼす効果の実証的研究（修士論文）	単	1997年	鳴門教育大学	個別の観察・実験の学習形態を取り入れた理科学習において、認知的側面・情意的側面・技能的側面からの学習効果の検討を行った。実験器具を一人に1台付与することで学習を個別化することにより、情意面では自主性や主体性、責任感や集中度、満足感や成就感など、認知面では数量的なとらえ方など、技能面では適切な操作と正確な測定などの学習効果が確認された。さらに、個別の観察・実験を可能にする実験器具として「簡易ガスビューレット」を開発し、これを用いて教材を中心とした理科、算数科、家庭科等との連携の有効性を検討した。
<b>3 学術論文</b>				
1. 総合的な学習の時間における協同的な学び	単	2009年	日本生活科・総合的学習教育学会『せいとか&そうごう』、第16号、28-35頁	協同的な学びの対象と価値を明らかにした上で、生活科の栽培活動につながる総合的な学習の時間の「きゅーきよくの桜もちを作ろう」の事例を通して、協同的な学びを深める手立てについて検討した。教材の構造（食にかかわる多様な価値観が存在する教材）、他者との協同の切実感を引き出す支援（協同する場面を学習過程に位置付けること、個々の子どもたちの持つ問題意識を互いに交流する仕方を工夫すること、問いが繰り返されるような教師の働きかけ）、多様な他者との出会いの場作り（多様な他者との出会いによって実現される価値を判断し、適切

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
2. 総合的な学習の時間における自律的・創造的な学び	単	2009年	日本個性化教育学会、『個性化教育研究』第1号、14- 23頁	<p>な他者と適切なタイミングで出会わせること)の3つの視点から、授業の実際に即して具現化することの重要性を明らかにした。</p> <p>教師が自律的・創造的な学びを自覚し、授業の実際に即して具現化することで、他者の生き方を自己の生き方や将来の姿と重ね合わせ、学習を生き方にまで深めていくことができる。そこで、「自律的・創造的な学び」を育むための実践上の工夫を6年生の「自己資金で科学の祭典を開催しよう」の事例を通して、具体的に検討した。その結果、「学習活動の目的を自覚させること」、「テーマと学習活動の必然性を吟味すること」、「学ぶ意欲を高める多様な支援を行うこと」の3点から「学習活動の主体としての意識」を持たせることが、自律的・創造的な学びには不可欠であることが明らかとなった。</p>
3. 交流学習が支援する食育	単	2009年	日本食育学会、『日本食育学会誌』、第3巻第2号、105- 109頁	<p>3つの学校で、みそ汁の食材や食材の感想・みそ汁を作った記録などを交換する交流学習を実施。実践の結果、「栄養バランスと朝食の大切さ」「地域の食材や旬のよさ」「自分の食生活の変化」「食文化への理解」「地域への関心」の5つの成果が明らかになった。食材の物々交換等による交流学習を進めることによって、望ましい食生活習慣の形成や地域への関心を高めることができること、みそ汁のように誰でもが話題にすることができ、またその共通体験を持っている上に、共通性と地域での違いという地域性を併せ持つ料理を取り上げて交流学習が食育を支援できることが明らかになった。</p>
4. 棚田に学ぶ子どもたち-地域にかかわり自ら学ぶ子どもの育成-	単	2003年	日本環境教育学会『環境教育』Vol. 12、NO. 2、53- 61頁	<p>棚田を取り上げた4年生の1年間の実践を学びの履歴のポートフォリオとウエビングマップの変容によって分析した。自然環境への関心や環境と人間のかかわりへの認識の高まりを確認できた。さらに、棚田を取り上げることの教材としてのよさが以下のように明らかになった。1) 地域を見ていく切り口となる教材としての役割(棚田を通して環境、暮らし、農業、歴史、人のかかわりが見えてくる。2) 地域を知り、そのよさが分かり、地域にかかわっていこうとする学習活動を構成する。3) 棚田のもつ多面的な機能を理解する過程で問題解決する能力や総合的な認識力を育てる。</p>
<b>その他</b>				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 身近なタネの教材化と授業実践-種子散布様式に着目して-	単	2006年	日本理科教育学会第55回全国大会発表論文集(徳島) p. 294	<p>本実践ではタネの実物、模型、その形状を活かした草花遊び、観察などの直接体験を通して種子散布の戦略やその生命力について教材化した。見る、ふれる、作る、遊ぶ、考えるという多様な活動によって種子散布様式に適応したタネの形態的特徴を理解し、身近な自然に親しみ、自然への理解を深めていくことが可能となった。追体験が容易で再現性においても優れたプログラム開発ができた。身近なタネを総合的にとらえる活動は理科を入り口にした総合的な学習・環境教育活動への提案となった。</p>
2. 食育がはぐくむ住まい手・つくり手-学校栄養士との協同作業によるまちづくりの可能性-	単	2006年	『「住まい・まち学習」実践報告・論文集7』(東京) pp. 15-20	<p>総合的な学習の時間と各教科とを相互に関連させた学際的なアプローチを通して食育がまちづくりへとつながる可能性について見いだした。地域の「食」にかかわる教材開発を協同で行うことやワークショップによる共同作業の効果を確認した。特に給食や伝統食など「食」にかかわる活動における地域の人のやり取りによって子どもたちは自分とは異なる立場の人を理解し、自信も理解されることの喜びを知り、コミュニケーションすることのおもしろさや大切さを実感できるなど、学びの継続や地域へつながる手だてを得ることができた。</p>
3. 食の学びが育む住まい手・つくり手-子どもと学校から始まるまちづくり-	単	2004年	『「住まい・まち学習」実践報告・論文集5』(東京) pp. 21-24	<p>食にかかわる学習を通して、子どもたちと学校から始まるまちづくりの可能性を検討。生活科、社会科、家庭科、総合的な学習の時間の実践を通じて、以下の効果を確認した。1) 食を通して、地位にある様々な「もの」や「人」と出会う場の設定によって、地域とのかかわりが多くなった。2) 地域にある「もの」や「人」と食とのかかわりについて考える機会を設定することによって、保護者の関心が高まり、地域の人の参画が増えた。3) 学習成果を次年度に生かして継続・発展させ、実践の質を高めていくことによって、地域とのつながりはより緊密になる。</p>
4. 「食」教育を通して育てる生活のリアリティ	単	2004年	第13回日本生活科・総合的学習教育学会全国	<p>学校栄養士の食にかける熱意や食への態度を子どもたちは生き方のモデルとして学ぶ。食の現場に生き</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
5. 「食」教育を通して育てる生活のリアリティ	単	2004年	大会論文集（高知） pp. 113-114  第13回日本生活科・総合的学習教育学会全国大会論文集（高知） pp. 113-114	<p>者の生活のリアリティに出会うことにより学びを深めることが可能となる。その際に、学校栄養士のもつ専門性と担任の子ども理解を合わせることで、より効果的な指導を行うことができる。さらに学校栄養士の地域とのネットワークや地域に根ざした学校給食の実践・食の指導の積み重ねという財産を生かして教材開発や単元創り、カリキュラム改善等の共同作業を行うことが大切となる。</p> <p>学校栄養士の食にかける熱意や食への態度を子どもたちは生き方のモデルとして学ぶ。食の現場に生きる者の生活のリアリティに出会うことにより学びを深めることが可能となる。その際に、学校栄養士のもつ専門性と担任の子ども理解を合わせることで、より効果的な指導を行うことができる。さらに学校栄養士の地域とのネットワークや地域に根ざした学校給食の実践・食の指導の積み重ねという財産を生かして教材開発や単元創り、カリキュラム改善等の共同作業を行うことが大切となる。</p>
6. 総合的な学習のカリキュラム評価と改善	単	2002年	第11回日本生活科・総合的学習教育学会全国大会論文集（茨城）	<p>総合的な学習の学びを深めるためには、活動から価値ある学びを作ることが求められる。4年生の単元「棚田探検隊」の学習履歴を作成し、その実践を評価し、カリキュラムを改善して、次年度に「きゅーきよくの桜もちを作ろう」の単元を開発、実践。ウェビングマップ等による「教材化の戦略」と学習の進展に応じて作成した壁新聞による「学びの継続的な支援」を行った。「カリキュラムの評価・改善」「教材化の戦略」「学びの継続的な支援」の3つの手だての有効性を確認した。</p>
7. 自然環境と暮らしの知恵にかかわり地域と創る学習一循環する学びが住まい手・つくり手を育む一	単	2001年	『「住まい・まち学習」実践報告・論文集2』（東京） pp. 3-6	<p>食や農の暮らしの知恵を通して子どもたちが住まい手やつくり手としての自覚を育む取り組みについて検討した。清流に生息するカジカガエルを通じて、自然とかわり、地域の価値を見いだす学習が、食や農の教材を通して地域の自然環境や暮らしの豊かで深いつながりとひろがりをもたらす学習が可能となった。さらに、自然環境と食や農にかかわる地域の課題がつながっていること、それを明らかにしていくことが、地域を見直し地域の生活文化を継承し創造する心を育む、つまり住まい手・つくり手の自覚と地域の参画を促すことが明らかとなった。</p>
8. 生活科におけるネイチャーゲームの導入ーネイチャーゲームを取り入れたクロスカリキュラムの開発を目指してー	単	1998年	日本環境教育学会研究発表要旨集（大阪） p. 24	<p>本報告ではネイチャーゲームに着目し、「フィールドビンゴ」「カメラゲーム」「カモフラージュ」を生活科に取り入れ、具体的な実践課題や学習効果を検討した。授業実践により得られた知見から「自然とのかかわり」の内容について、効果が確認できると共に、ネイチャーゲームを取り入れた活動計画を作成し、ネイチャーゲームが教科・学習内容を結びつけるクロスカリキュラムの可能性を検討した。環境教育の展開に貢献できる総合的な学習カリキュラム作りを目指すヒントも得られた。</p>
9. 個別実験・観察による理科と他教科との関係	単	1997年	個別実験・観察による理科と他教科との関係	<p>個別の観察・実験の学習形態を取り入れた理科学習において、実験器具を一人に1台付与することで学習を個別化することにより、情意面では自主性や主体性、責任感や集中度、満足感や成就感など、認知面では数量的なとらえ方など、技能面では適切な操作と正確な測定などの学習効果が確認された。さらに、個別の観察・実験を可能にする実験器具として「簡易ガスビューレット」を開発し、これを用いて教材を中心とした理科、算数科、家庭科等との連携の有効性を検討した。</p>
10. 理科と他教科の連携を支援する教材の開発	単	1997年	『日本理科教育学会四国支部会報』、21頁	<p>「簡易ガスビューレット」を開発し、これを用いて「気体の発生」「気体の膨張」「気体の溶解度」「水中植物の光合成」など小学校学習指導要領での気体教材の展開例の検討を加えた。さらに授業実践を通じて、教材を中心とした理科、算数科、家庭科等との連携の有効性を検討した。</p>
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
学会及び社会における活動等				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2014年	文科省スーパー食育スクール事業選定委員会委員
2. 2013年	今後の学校における食育の在り方に関する有識者会議委員
3. 2012年	兵庫県学校食育実践検討委員会（現在に至る）
4. 2011年4月～現在	徳島県環境学習プログラム推進委員会専門委員
5. 2009年	文部科学省「食に関する指導の手引き」作成委員
6. 2009年	日本個性化教育学会会員（現在に至る）
7. 2008年04月～現在	徳島県環境アドバイザー
8. 2007年	日本食育学会会員（現在に至る）
9. 2003年現在に至る	環境教育担当教員指導者講習会講師
10. 2001年	日本生活科・総合的な学習教育学会会員（現在に至る）
11. 1998年	日本環境教育学会会員（現在に至る）